

## 韓国語学習におけるビデオレポート活用の効果 Effect of the Video Report System in Learning Korean

畑 耕治郎\*<sup>1</sup>      村上 純\*<sup>1</sup>      田中 秀樹\*<sup>1</sup>  
Kojiro HATA      Jun MURAKAMI      Hideki TANAKA

\*<sup>1</sup> 大手前大学  
Otemae University  
Email: k-hata@otemae.ac.jp

**あらまし**：本研究では、本学の通信教育課程で開講している韓国語の授業において、通信教育では不足しがちなアウトプット学習を補う学習活動として、ビデオレポートによる相互発表を試行的に取り入れ、その効果を検証した。その結果、ビデオレポートによる相互発表が通信教育における新たな学習活動として有効と思われる結果を得ることができた。

**キーワード**：語学教育 相互評価 ビデオレポート 通信教育 eラーニング

### 1. はじめに

本研究の目的は、独自に開発したビデオレポートシステム「VCMaker」<sup>[1]</sup>をさまざまな教育活動に活用し、その有効性を明らかにすることである。

「VCMaker」は、簡単な操作で PowerPoint や Word の資料とカメラ映像を組み合わせたコンテンツ（ビデオレポート）を作成することができる WEB システムであり、コンテンツの作成に加え、コンテンツの蓄積や配信も容易に行えることが特徴である。本学では、「VCMaker」をプレゼンテーションの練習や発表会の記録、また簡易的な教材作成ツールとして、さまざまな教育や学習の場面で活用し、その有効性を検証しているところである。

本研究では、本学の通信教育課程で開講している韓国語の授業において、アウトプット学習を補うものとして、「VCMaker」で作成したビデオレポートによる相互発表の課題を試行的に取り入れた。語学教育では、インプット学習に加えてアウトプット（発声・発音・発語・発話・対話など）学習が重要であるが、通信教育では対面式の授業と異なりアウトプットの学習が不足しがちになる傾向があり、本学でも課題とされていた。本研究の対象とした韓国語Ⅱの授業は、「基礎」編を経た学生を対象にする「応用」編であり、本取り組みの意義や必要性が大いにある授業と考えている。

### 2. 授業の概要とビデオレポートの位置付け

本学の通信教育課程においては、現在「韓国語Ⅰ（基礎）」と「韓国語Ⅱ（応用）」が開講されており、ビデオレポート課題は「韓国語Ⅱ」の最終回に配置された課題で授業の総まとめとして位置付けられている。韓国語Ⅱに配置されたビデオレポート課題では、「書く」「話す」の学習のまとめとして、次のような課題を課した。

① 「VCMaker」を用いて 3～5 分のビデオレポートを作成する。

② 資料部分はパワーポイントまたはワードで作成

する。

③ 作成したビデオレポートを科目掲示板に投稿し、相互発表形式で互いにコメントする。

また、資料部分の作成に当たっては以下のことも工夫するように指示した。

- ・自己紹介に加え、自分と韓国とのつながり（旅行、料理、ドラマなど）についても触れる。
- ・授業で習った内容（数字、歌、文章表現など）を取り入れる。
- ・できるだけ韓国語で話し、韓国語で記述する。

### 3. ビデオレポート課題の結果

#### 3.1 学習状況

韓国語Ⅱの受講者数は 35 名で、そのうち最終課題であるビデオレポートの課題に取り組んだ学生は 28 名であった。当初は、ビデオレポート課題が原因で学習を停滞してしまう学生が出てくるのではないかと心配していたが、ビデオレポート課題が原因で学習を停滞したと思われる学生は 1 名であった。この 1 名は当該課題以外の学習はすべて終了しているにも関わらず当該課題のみを実施していない状況であった。他にも学習が停滞している学生は 6 名存在していたが、いずれも当該課題に取り組む以前の早い回ですでに学習が停滞していることから別の原因によるものと思われる。

#### 3.2 「話す」の学習成果

提出されたビデオレポートは、いずれも力作揃いで、照れながらもとても楽しんで作られた様子が伺える内容であった。なかには途中でお子様が飛び入りで顔を出すなど社会人の多い通信教育で、かつビデオレポートならではのライブ感あふれるレポートが多かった。いずれのレポートも映像に出ることのためらいや恥ずかしさが多少見受けられるものの、予想以上に積極的に韓国語を用いて発表されていた。

発表のテーマについては以下のような内容が多く取り上げられていた。

- ・韓国語で歌を歌う 14 名
- ・韓国料理を紹介する 5 名
- ・韓国旅行の写真やお土産を紹介する 10 名
- ・韓国映画・ドラマ・k-pop を紹介する 5 名
- ・韓国語で早口言葉を言う 2 名

比較的多くの学生が韓国語で歌を歌う内容を盛り込んでおり、これについては授業のある回で韓国語の童謡を聞いて歌詞を学ぶ内容があったため、それをモチーフにしたものと思われる。提出されたレポートの中には、童謡以外にも聖歌やドレミの歌、アンパンマンの歌、k-pop など幅広いジャンルの韓国語の曲が発表されていた。

### 3.3 「書く」の学習成果

資料作成については、パワーポイントで資料を作成した学生は 12 名、ワードで資料を作成した学生は 7 名、資料がなく映像のみは 9 名であった。自宅のパソコンにパワーポイントがインストールされていないことや「VCMaker」の使い方が分からず資料が添付できなかったなどがこのような結果につながったものと思われる。

韓国語の記述については、図 1 のように韓国語と日本語を組み合わせる資料が多く、比較的短い文章で表現されているものが多く見られた。

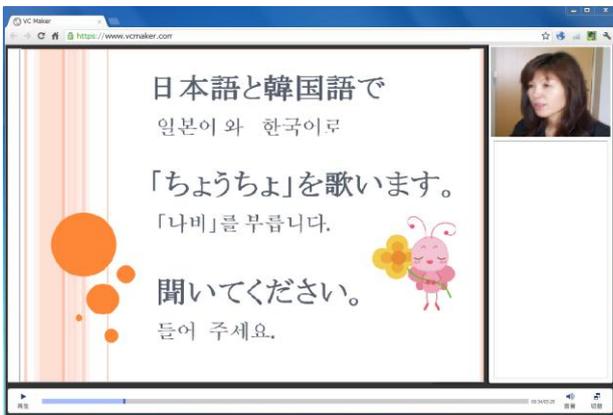


図 1. ビデオレポートの例

### 3.4 「相互評価」の学習成果

掲示板による相互評価に関しては、掲示板には「最初はビデオに出ることに抵抗があったが他の学生の発表を見て、自分も良いものを作ろうという意識が出てきて楽しく取り組めた」や「他の受講生の作品を見ることができたことがとても刺激的で、さらに学習意欲が湧いた」との前向きな意見が多く見られた。また、カメラでの撮影やマイクでの録音をはじめて行う学生が多かったため、互いにカメラ位置や音量などについて、アドバイスし合う様子もみられ、互いの苦労を共有し、称えあう場として掲示板が有効に活用されていた。



図 2. コメントをし合う掲示板の様子

## 4. まとめ

本研究では、通信教育課程で開講している韓国語の授業において、アウトプット学習を補う学習活動としてビデオレポートによる相互発表を試みた。

本取り組みを行うに当たっては、ビデオレポート課題が原因で学習を停滞してしまわないか、またコンピュータスキルの低い学生でも対処できるかなどいくつかの課題が挙げられていたが、心配していたほど学習進捗に悪い影響はなかった。

韓国語の授業を担当した教員からは、積極的に韓国語を発話する学生の姿が見られ、創意工夫がなされた資料が作成されていることから、「書く」「話す」といった学習活動において効果が期待できる試みであった、そしてインタラクティブとまではいかないにせよ学生の発音や表記、文章表現力など学習の成果を確認することができ、通信教育における教育活動の幅が広がったという意味で非常に意義深い試みであったとの評価を得ることができた。

さらに相互評価に用いた掲示板の書き込みでは、互いのレポートやコメントが学習者同士で良い刺激を与えていると思われる内容が多く見られたことからさらなる分析を加え、その効果を検証していく予定である。特に通信教育では普段、他の学生と顔を合わせる機会が少なく、自身の学習が他者と比較してどの程度のレベルにあるのかを確認することが少ないため、今回の試みで他者の状況が把握できたことが語学学習としての学習効果に加えて、通信教育における学習のモチベーションの向上にも寄与できるのではないかと期待している。今後は、システムとしての使いやすさを追求するとともに、ビデオレポート課題の実施時期や実施回数など運用方法の改善に取り組む予定である。

### 参考文献

- (1) 畑耕治郎, 田中秀樹: “ビデオレポートシステムを活用した教育活動の試み”, 教育システム情報学会, 第 35 回全国大会講演論文集, pp. 519-520 (2010)